

継承語をめぐる言語イデオロギーとアイデンティティ：* 日本に生まれ育ったニューカマー2世のライフストーリーから

中家 晶瑛

(上智大学大学院言語科学研究科言語学専攻 博士後期課程)

Language Ideology and Identity in Heritage Language: Based on the Life Story of a Second-generation Newcomer, Born and Raised in Japan

NAKAIE, Shohei

Sophia University Doctoral Program in Linguistics

This study clarifies the language ideology and identity of Yumika, a second-generation newcomer born and raised in Japan, and examines their changes in these over time. A semi-structured interview was conducted with Yumika to explore her identity and ideology regarding her heritage language. Thematic analysis of the interview transcripts revealed that Yumika’s language ideology regarding her heritage language gradually weakened owing to the strong primordialist ideology (Canagarajah 2019) seen in her elementary and junior high school years. Eventually, she broke away from the heritage language ideology (Nakaie 2024), and as she entered high school and university, her practice-based ideology of heritage language (Canagarajah 2019) became more pronounced. In this way, Yumika’s own language ideology was seen to have changed. Furthermore, Yumika had an essentialist identity during her elementary and junior high school years. However, after entering university, she formed an independent identity as a speaker of the inherited language. These findings suggest that an individual’s language ideology gradually changes over time and is deeply related to identity.

キーワード：継承語，言語イデオロギー，ライフストーリー，アイデンティティ

Keywords: heritage language, language ideology, life story, identity

1. 研究背景・問題意識
2. 先行研究
3. 調査・分析方法
4. 結果・考察
5. まとめ

* 本研究に協力してくださった調査対象者の弓佳さん（仮名）に、心より感謝申し上げます。この論文はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究 (jrp000267)」，2023年度第2回研究会（2024年2月26日）での発表に基づいています。



1. 研究背景・問題意識

グローバル社会のもとで、国境を超えた人々の移動や往来は常態となった。トランスナショナルな移民家庭では、多くの親にとって、自分の母語（第一言語）を子どもに伝えることは大きな関心事のうちの一つであり、自分の母語を子どもに伝えるために並々ならぬ努力をする。トランスナショナルな移民家庭の子どもにとって、親の母語は「継承語」とされる（中島 2017）。移住先の国で生活するトランスナショナルな家庭の親が、継承語を子どもに伝えることは、多くの研究蓄積から認知的および情緒的に重要なことであるとされている。具体的には、言語学習の基礎となる継承語が安定していると移住先の国での学業成績にも好ましい影響がある（中島 2016）。また、子どもが継承語を身につけていることによって、親は自らの母語で子どもに語りかけることができ親子間の豊かなコミュニケーションが果たされ、良好な親子関係および子ども自身のアイデンティティを形成する（Fillmore 2000）。

しかし、上述のような利点があっても、全てのトランスナショナルな移民家庭で子どもが容易に継承語を身につけられるとは限らない。例えば、社会・経済的状况から、家庭内で親の母語ではなく現地語を使用するようになった家庭や（Nakamura 2016）、子どもに自らの母語を教えるのを断念せざるを得なかった親もいる（坂本・宮崎 2016）。また、周囲の人々による言語能力への期待やプレッシャーといった阻害から、継承語を身につけられなかった子どももいる（中家 2024）。このように、子どもの言語能力には子どもの生まれ育ちの環境や経緯が大きく関わる。例えば、同じトランスナショナルな移民家庭の子どもでも、日本に生まれ育った子どもは、日本社会の主流言語である日本語を家庭内外で日常的に使用し、親の母語は一部聞いて理解できるが話せない場合や、日常的会話程度の継承語能力を有する場合がある（中家 2023）。一方で、外国に生まれて小学校入学前に日本に来た子どもの中には、生まれてから日本に来るまで親の母国で母語を使って生活していたことから、親の母語をある程度身につけている場合もある（坪田 2018a）。このように、トランスナショナルな移民家庭の子どもの継承語の能力は、子どもの生まれ育ちに大きく関係するため、彼らの生まれ育ちの差異に着目することが重要である。その上で、子ども自身が認識する社会的な言語の認識・信念・感情を指す言語イデオロギーやアイデンティティとその変遷を明らかにすることで、移民家庭の子どもの言語継承を検討することができると考える。

以上から本研究では、トランスナショナルな移民家庭の子どもの生まれ育ちの差異に着目することから、従来の研究では強調されてこなかった、日本に生まれ育った子どもに焦点化する（その理由は後述する）。ライフストーリーを通して、

継承語学習の経験と継承語に対する言語イデオロギーとアイデンティティとその変遷を明らかにする¹。

2. 先行研究

2.1. 用語の定義と使い分け

本稿で調査の対象とするのは、ニューカマー2世である。山本・榎井 (2023: 30) は、「1970年代以降（とりわけ1990年に施行された出入国管理及び難民認定法）に急増した外国人」をニューカマー外国人としている。具体的には、1970年代後半以降に来日した、インドシナ難民や中国帰国者とその家族、日系人や就労者、留学生などもニューカマーである。上述のように、言語使用の側面からは、子どもの生まれ育ちの環境が大きく関係することから、それぞれの子どもの生まれ育ちの差異、つまり日本生まれか外国生まれかを分けて考える必要がある。このとき、Rumbaut (2006) の定義を用いることが有用である。Rumbaut (2006) は、移住国生まれの子どもを2世、12歳までに移住先に来た子どもを1.5世と区分した。本研究もこのRumbautの区分を用い、外国に生まれ、6-15歳の学齢期に外国出身の親に連れられ、日本に来た子どもを「ニューカマー1.5世」、外国出身の両親のもと、日本に生まれて育った子どもを「ニューカマー2世」とする。これを踏まえて、本研究では、「日本生まれ日本育ち」のトランスナショナルな移民家庭の子どもを、以下「ニューカマー2世」とする。

広く一般的な定義では、母語は「自分が一番初めに習得したことば」を指し、継承語は「移民の親やその上の世代が母語とすることば」を指すことが多い。しかし、母語・継承語について使い分けや差異については、研究者の立ち位置によって異なる。2000年代初頭では、子どもの日本語教育の分野では、母語と継承語を「母語・継承語教育」とひとまとめに捉える研究も見られた（松本 2005 など）。一方で中島 (2017) は、母語と継承語は「同意語」として使用されることもあるが、微妙な相違点が存在すると述べる。中島 (2017) は、「母語」と「継承語」のどちらの呼び方を用いるかは、移住時の年齢によって変わるとし、親のことばが定着する2歳から14歳までを超えて移住した子どもにとって、その親のことばは「母語」であるが、その年齢の間での移住では、親のことばの定着過程が異なるため「母語」ではなく「継承語」のほうが適するとした。これを踏まえ中島 (2017: 2) は、Skutnabb-Kangas (1981) の定義を引用し、母語を「1. 最初に習得した言語, 2. 最も熟知している言語, 3. 最も頻繁に使用する言語, 4. 自他が母語であるとみなす言語」とした一方で、継承語を「継承語とは親の母語, 子どもにとっては親から継承する言語」と定義している。本研究でも、上述の中島 (2017) の定義に倣う。

¹ 本研究は中家 (2022a) の一部を、言語イデオロギーとアイデンティティの観点から加筆修正したものである。

2.2. 子どもの生まれ育ちの差異とニューカマー2世

ニューカマー2世は、日本に生まれ育ち、日本の学校教育を受けることから、彼らの母語や家庭内言語も、日本語が主となることがあり(中家 2023), 彼らは日本人の子どもと同様の言語文化や価値観・習慣を有する場合もある。例えば高橋(2013)は、2つの小学校の事例からニューカマー2世である日本生まれの中国帰国児童について研究した。高橋(2013)は、既存の研究で明らかにされたのは、日本語以外の母語を持ち、日本語や日本文化の壁などの困難のあるニューカマー1.5世の児童であると述べ、彼らとニューカマー2世である日本生まれの中国帰国児童との相違点を指摘した。高橋(2013:15)は、ニューカマー2世の児童は、「日常の日本語会話にほとんど問題がなく、服装や態度・行動などにおいてもほぼ日本人化している」と論じた。

しかし、一部の先行研究ではニューカマー1.5世と2世の生まれ育ちの差異が不可視化されることもある。田・櫻井(2017)の継承中国語教育の実践研究において、中国語を継承語とする日本生まれのニューカマー2世の児童と、中国語を母語とする学齢期に来日したニューカマー1.5世の児童とともに「中国ルーツのCLD児童」²としている。また、坪田(2018a, b)や三浦(2015)は、ニューカマー1.5世とニューカマー2世を含めたニューカマー第2世代を対象とし、彼らの学業達成・キャリアなどのライフコース、アイデンティティ形成を研究した。しかし、どちらもエスニック集団や移民コミュニティにおけるニューカマーの子どもの様相を明らかにすることが主題であり、ニューカマー1.5世とニューカマー2世の生まれ育ちの差異に着目していない。いずれの研究でも、調査対象者数においてニューカマー1.5世が全体の半数以上の数を占め、ニューカマー2世がニューカマー1.5世とほとんど差異のない存在として捉えられる可能性も捨てきれない。これらの研究ではニューカマー2世は個別で扱われていないが、その一方で、ニューカマー2世に特化した研究も存在する。中家(2022b, 2023)はニューカマー2世に特化し、ニューカマー2世とその親の継承語の言語意識と、親による言語継承への意向や家庭言語政策(Family Language Policy; FLP)を明らかにした。

以上のように、日本社会における移民の子どもは、その中でも特に、日本語以外の母語を持ち、日本語や日本文化の壁などの困難のあるニューカマー1.5世が念頭に置かれて研究されてきた。また、それぞれの子どもの生まれ育ちが多様で複雑であることから「CLD児童」「ニューカマー第2世代」などと、それぞれに共通事項が注目され、子どもの生まれ育ちの差異には着目されてこなかった。そのため、子どもの生まれ育ちに着目する本研究では、ニューカマー1.5世と相対的に研究蓄積が薄いニューカマー2世に焦点化する。そして、彼らの言語イデオロギーとアイデンティティ、その変容を調査する。

² Culturally and Linguistically Diverse Students : 言語文化的に多様な子ども(カミンズ・中島, 2011)

2.3.言語イデオロギーと継承語に関するアイデンティティ

言語イデオロギーは、言語に関して社会的に共有された認識、言説、信念、意見や感情の集合体とされている。ドーア（2008: 64）は Kroskrity（2000）を引用しながら、言語イデオロギーを「ある社会集団内の階級、性別、世代等の違いを反映して多様であり、個人によって様々な度合いで認識され、社会構造と個人の言語活動を関連づける、ある特定の社会集団の利害にそって構築された言語についての認識や言説」と述べた。これを踏まえ、継承語に関する言語イデオロギーを見ていく。

Canagarajah（2019）は、原始的イデオロギー（Primordialist Ideology）と、継承語の実践に基づくイデオロギー（The Practice-based Ideology of Heritage Language）の2つの継承語に関する言語イデオロギーを提唱し、タミル人のディアスポラ・コミュニティの家族が、継承語と継承語能力をどのように捉えているかを明らかにした。前者の原始的イデオロギーは、コミュニティ、民族性、アイデンティティと継承語を固定的に結びつける言語イデオロギーである。例えば、「〇〇のコミュニティの人々は△△語が話せる」「△△語を話せることで、〇〇人のアイデンティティを有する」などといった、コミュニティと言語、アイデンティティを固定的・本質的に結びつけるイデオロギーである。それに対して、後者の継承語の実践に基づくイデオロギーは、継承語は変化するものであり、多様な他言語の記号的リソースを利用する可能性があり、ハイブリッドで相対的なものであるというイデオロギーである。この言語イデオロギーでは、ディアスポラ・コミュニティの一員は、高度な継承語能力がなくともエスニックコミュニティの空間に参加できるということ、部分的な継承語能力・継承語の言語レパートリーは、継承語が指標する典型的な機能や、個人の新たなアイデンティティを示すことができるとしている。また一方で、似た概念として中家（2024）は、ニューカマー2世の言語継承に関する語りから、「言語・民族・国家の結合意識に基づいた継承語能力への過度な期待・プレッシャー」の存在を明らかにし、これを継承語イデオロギーとした。そしてこれは、移民の親や親戚などが、移民の子に向ける、継承語習得への強い願望によって生じる。

アイデンティティは、多岐にわたる分野で用いられており、そのアプローチは実に多様である。社会言語学および応用言語学におけるアイデンティティについて、Pavlenko & Blackledge（2004）は、アイデンティティ交渉には、3つのアプローチからなるパラダイムが存在するとしている。まず1つ目は、第二言語学習や言語使用におけるアイデンティティ交渉を検討する社会心理学的アプローチ、次に2つ目は、コードスイッチングや言語選択におけるアイデンティティ交渉を指す相互行為的社会言語学的アプローチ、そして最後に3つ目は、社会における力関係は個人のアイデンティティ形成に影響を与えるものの、過去と現在に関係する要因によって本質主義的に押し付けられることなく、個人は自分自身の経験から形成するもの、つまり、前述2つのアプローチからの脱却志向のあるポスト構

造主義的アプローチである。ポスト構造主義は、個人の主観性がアイデンティティに及ぼす影響を受け入れ、アイデンティティの構築を個人の主観性が関与する力関係の中に組み込まれたプロセスとされる (Norton 2000)。上述の Canagarajah (2019) の継承語の実践に基づくイデオロギーで見られるアイデンティティもこのアプローチとなる。継承語の実践に基づくイデオロギーでは、部分的な継承語能力・継承語の言語レパートリーは、継承語使用者である個人の新たなアイデンティティを示せるとしていることから「継承語使用者としてのアイデンティティ」が形成されると考えることができよう。

このポスト構造主義的アプローチのアイデンティティの立場から、継承語に関するアイデンティティを捉えた研究を見てみると、尾関他 (2011) は、日本国外で成長した若者のインタビュー調査から、彼ら自身の継承語である日本語に対しどのような意識を抱いたか、日本語使用経験の意味づけから、継承語に関するアイデンティティを明らかにした。その結果、当初「ハーフだから日本語ができて当然」といった周囲や社会の言語イデオロギーと、自らの言語イデオロギーとのギャップから成る継承語に関するネガティブな意識や経験があったにもかかわらず、調査対象者の大学生は周囲の人々と継承語で意思疎通し人間関係を構築できた。尾関他 (2011) は、継承日本語話者が周囲の人々の関係性から継承語使用に肯定的な認識を得る様子を「実感に支えられた日本語使用の経験」と呼び、このような経験が彼らのアイデンティティを形成していたことを明らかにした。また、倉田 (2018) は、学齢期にオーストラリアへ移動した日本語使用者にインタビューし、セルフ (将来の自己イメージ) は、継承語を自分のなかでどのように位置づけているかというアイデンティティとどのように関わるかを明らかにした。その結果の一部では、ある調査対象者は、「日本人名と日本人らしい外見を持つ」ことで、自らが認識する能力を上回る日本語能力を人々から期待されていることを認識していたものの、そのほかの場面においては、新聞等の生の日本語を勉強のためではなく、情報を得るために読めるようになりたい、という、いわば継承語使用者としてのアイデンティティを形成していることがわかった。

以上の言語イデオロギーとアイデンティティの先行研究からは、移民の子どもを取り囲む環境に存在する言語イデオロギーは、アイデンティティとともに存在し、子ども自身のアイデンティティ形成となんらかの関わりがあることがうかがえよう。以上を踏まえ、本研究は、個々人の生まれ育ちや人生の歩みを本人が語るライフストーリーから、日本に生まれ育ったニューカマー2世の継承語への言語イデオロギーとアイデンティティ、およびその変遷を明らかにすることを研究課題とする。

3. 調査・分析方法

3.1. 調査対象者について

調査対象者は、外国出身の両親のもと、日本に生まれ育ち、母語を日本語とし、移民の子どもが多い環境で生まれ育った弓佳さん（仮名、20代前半・女性）である³。本研究は、ニューカマー2世の生まれ育ちの経緯に焦点化し、当事者の視点から、出来事や事象、経験に対する調査対象者自身による意味付けを通して、言語イデオロギーとアイデンティティを探索的に明らかにする事例研究である。

弓佳さんの詳細や、家庭の言語環境は以下の通りである。弓佳さんは父母と妹の4人家族であり、弓佳さん一家は、インドシナからの難民や中国帰国者が多く居住する神奈川県横浜市の県営団地に住んでいる。弓佳さんの両親は、中国帰国者家族として来日した。父親の日本語能力は比較的高いものの、母親の日本語能力は高くなく、父母同士は中国語で会話するという。弓佳さんは、こうした言語環境から中国語の日常会話は聞いて理解できるが、一度も中国の親戚を訪れた経験や、中国で生活をした経験がないことから、中国語会話能力を有さず、家族（父母、妹）に対して日本語を使用して意思疎通する。父親は弓佳さんに日本語、母親は弓佳さんへ中国語とごく簡単な日本語で意思疎通するという。また、母方の祖父母以外、父母の親戚は皆来日し、日常的に交流がある。特に母方の親戚やいところは、中国語で意思疎通できる人が多いという。

3.2. 調査方法と分析方法について

調査は、2022年2月と3月にそれぞれ1回、計2回、90分ほどのオンラインインタビューを実施した。1回目は、非構造インタビューを行った。生い立ち、学校生活、言語環境など時系列にライフストーリーを語ってもらい、弓佳さんの基本情報を得た。2回目は、半構造化インタビューを実施した。1回目のインタビューから得た情報を基に、弓佳さんの継承語への意識と継承語学習に至る迄の思いや考え、その変遷を聞いた。また、筆者である調査者自身も、ニューカマー2世であることを伝えて当事者性を開示し、弓佳さんとともに語りを構築していった。

分析方法は、テーマ分析（Boyatzis 1998）を用いた。テーマ分析は、データの中に主題（テーマ）を見出すための体系的なプロセスである。弓佳さんの継承語に関する語りに潜在的に存在する主題を顕在化することを可能にすると考え、用いることとした。テーマ分析の中でも、分析単位が1つ（1人、1組織など）の場合に適するハイブリッドアプローチを採用した。ハイブリッドアプローチでは、帰納的に分析を行い、分析から生成されたテーマを、既存の理論を用いて解釈する。本研究もそのように分析を実施した。分析の手順は土屋（2016）に倣い、まず、逐

³ 脚注1において述べたように、本研究は修士論文（中家 2022a）の一部を加筆修正したものである。この研究が含まれる修士論文での調査対象者は、外国出身の両親のもと、日本に生まれ育ち、母語を日本語とする20-30代のニューカマー2世青年7名であった。また、研究課題は継承語への意識とアイデンティティはどのようなものか、であった。

語録を熟読し、意味のまとまりをコーディングユニットとしてインタビューの逐語録をコーディングした。それに並行し、コードの定義を記したコードブックを作成した。次に、類似したコードをまとめ、コードブックを発展させた。そしてその後、テーマおよびサブカテゴリーを生成した。

4. 結果・考察

本節では、テーマ分析により生成されたテーマと付随するサブカテゴリーを考察する。4.1 では、得られたテーマとサブカテゴリーを示し、カテゴリーを内包する小・中学校、高校・大学の2つの環境やコミュニティについて概要をまとめる。4.2 から対応する弓佳さんの語りを示しながら、本稿の目的である、継承語への言語イデオロギーの変遷がどのようなものか考察する。なお、語りのなかで弓佳さんは継承語を「中国語」と称したことから、語りに付随する部分においては継承語のことを「中国語」と記述する。

4.1. 得られたテーマとサブカテゴリー

分析の結果、8つのテーマが生成された。それらは、テーマ①継承語話者への憧れと願望（サブカテゴリー：募る憧れ、中国とのつながりの希求）、テーマ②継承語学習への重圧（サブカテゴリー：母の希望、継承語話者の存在）、テーマ③意識的言語学習への苦手意識（サブカテゴリー：自然習得への憧れと希望、成果を出すことの負担と回避）、テーマ④継承語学習の断念と自己納得（サブカテゴリー：私は日本人、みんな違ってみんないい）、テーマ⑤義務感への薄れ（サブカテゴリー：比較対象の不在、言語能力の非永続性）、テーマ⑥追求しない継承語能力観（サブカテゴリー：親の意図をくむ力、支援のツールにすぎない言語）、テーマ⑦安心できる継承語学習環境（サブカテゴリー：学習仲間との存在、特別扱いされない環境）、テーマ⑧継承語学習の先に見据えるもの（サブカテゴリー：継承語と仕事、挑戦と成功体験）であった。（図1参照）。

まず、テーマ①～④が内包される弓佳さんの小・中学校の環境に関する語りの概要は、以下の通りである。弓佳さんが通学していた学区の小・中学校は、外国につながる児童生徒が多い学校であった。小学校は、児童が来た国のあいさつのカードを持って先生が毎朝校門に立っていたり、各国の国の料理が給食で出されていたり、子どもたちの背景にある言語文化や個性を尊重する環境だったという。また、弓佳さんの小学校の友人は、ニューカマー1.5世の子どもや、夏や冬の長期休みに、親の母国へ親戚を訪れるといった2世の子どもが多く、多くの友人が親の母語を話せたという。そうしたことから、親の母語を聞いて話せる子どもが多いことで、親の母語を話せない弓佳さんはマイノリティであった。こうした環境から、弓佳さんは継承語に対して複雑な意識を抱く。これについてテーマ①～④は、このあと4.2より詳述する。

そして、テーマ⑤～⑧が内包される弓佳さんの高校・大学の環境に関する語りの概要は、以下の通りである。弓佳さんは市外の高校に進学し、移民の生徒が珍しい存在となる、日本人・日本語のモノリンガル・モノカルチュラルな環境に身を置くことになった。周囲に自分と似た境遇の生徒がいないことから、継承語能力を比較されることのなかったこの環境は、弓佳さんに精神的安らぎを与えるものでもあった。さらに弓佳さんは大学に進学後、外国語として履修した中国語授業で、授業で扱う中国語を難なく理解できることに気づいたのである。これについてテーマ⑤～⑧は、このあと 4.3 より詳述する。

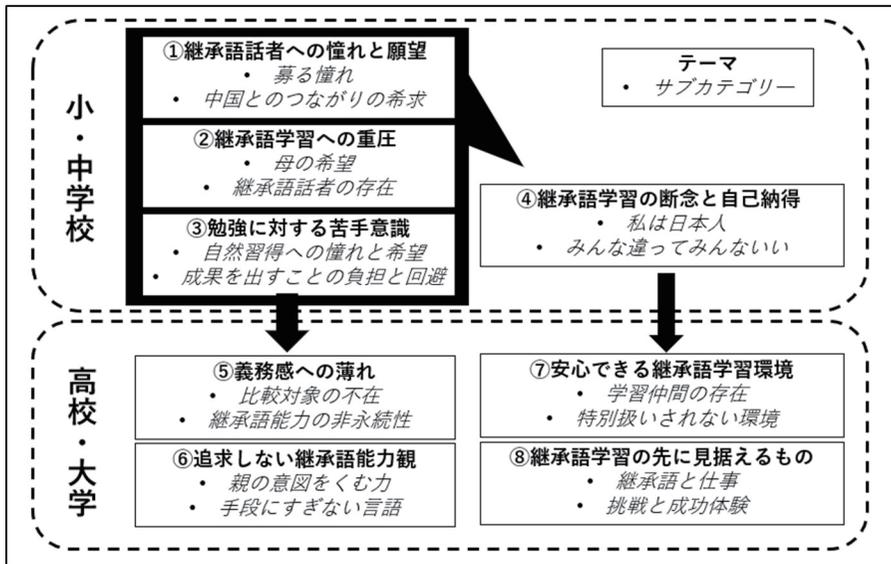


図1 テーマ間の関連性

4.2. 小・中学校における言語イデオロギーと継承語学習

本節では、小・中学校における弓佳さんの言語への認識が見られたテーマ①～④を考察していく。

4.2.1. テーマ①継承語話者への憧れと願望

テーマ①について、弓佳さんの周囲には、ニューカマー1.5世の友人が多かった。彼らは弓佳さんと同様に両親が外国出身であったが、生まれ育ちの場所と、親の母語と日本語のバイリンガルであった点が弓佳さんと異なった。友人たちがバイリンガルであることに対し、親の母語を話せない弓佳さんは憧れと羨ましさのぞかせていた。加えて弓佳さんは、自分の生まれ育ちの環境が周囲の友人とは異なっていたという。(1)の発話データは、弓佳さんは親の母国である中国に行き言語文化に触れた経験がないため中国語を話せない、という語りである。

(1) 発話データ：サブカテゴリー 中国とのつながりの希求

「あとはもう定期的に、日本で生まれてるけど、中国とかベトナムに帰るみたいな子が多くて。私の家はそういうのがなかったから、中国への文化、触れるっていうのが私は1回もなくて。私1回も帰ったことないんですよ中国に。だからそれもあってなんか自分は中国につながってるけど、喋れないからって思って、ちょっと勉強しようって多分思ったんだろうなっていう。」(2022年3月)

弓佳さんは、自分自身と同様なニューカマー2世の友人も、長期休みに定期的に親の母国を訪れるといった例を挙げながら、自分は親の母国に行って生活した経験がないことを数回強調し、親の母国とのつながりを感じられないでいたことを話した。その背後には、弓佳さん一家の親戚は、母方の祖父母を除き全て来日していることや、中国に残った母方の祖父母が、弓佳さんが幼少期のころにすでに他界していたことから、弓佳さん一家には、中国を訪ねる親戚はいなかったという理由がある。こうした理由から弓佳さんは、中国とのつながりを得るため、継承語を勉強しようと思いついたという。

ここで、弓佳さんは「中国につながってるけど、喋れないから」と中国につながりがあるものの、「けど」と逆接的表現のあとに「喋れないから」と話し、中国につながりがあるにもかかわらず継承語能力がないことは、望ましい状態ではないと見なしていることがうかがえる。ここでは、中国につながりがあるが訪れたことも生活もしたこともない弓佳さんは、中国とのつながりとその証左を獲得するために、継承語学習に取り組みたい、継承語能力を得たいと考えたのである。ここからは、弓佳さんにとって、中国とのつながりの証左として継承語能力を得ることは、自らのアイデンティティになると考えていることがうかがえる。Canagarajah (2019) の原始的イデオロギーが示す「〇〇のコミュニティの人々は△△語が話せる」「△△語を話せることで、〇〇人のアイデンティティを有する」といったコミュニティ、民族性、アイデンティティと継承語を固定的に結びつける言語イデオロギーが、この弓佳さんの語りからうかがえた。

4.2.2. テーマ②継承語学習への重圧

テーマ②については、このように弓佳さんは、周囲の友人である継承中国語話者の存在から、明示的でないものの継承語学習への重圧を感じていた。加えて弓佳さんは、中国語が話せる母方のいとこたちの存在から、母親の「いとこたちのように自分にも中国語を話せるようになってほしい」という希望を折に触れ伝えられていた。母方の親戚には、弓佳さんと大きく年の離れたところが多く、中国語を話せるいとこや、中国へ語学留学するいとこもいた。弓佳さんは、コミュニティで使用されている言語、つまり親の母語(弓佳さんにとっては継承語)の能力の有無に関して、周囲と自分を比較していたという語りである。

(2) 発話データ：サブカテゴリー継承語話者の存在

「小学校のときとかもやっぱり親戚の、お母さんの方（の親戚）とかみんな（中国語）喋れるようになってたりとかしてて、なんか周りの友達とかも喋ってて。私も喋らなきゃいけないのかなみたいなのが思ってた時期はありました。＜中略＞その時はちょっと思ってたね。周りと比べて、って。」（2022年3月）

このように、弓佳さんは周囲のニューカマー1.5世の友人や親戚と異なり、親の母語（弓佳さんからすると継承語）を聞いて理解することはできるが、話すことができないことから、彼ら大勢の存在と自分を比較していた。コミュニティのことば、つまり親の母語を話せないというマイノリティである自分は、周囲の友人やいとこのように継承語を話せるようにならないといけないのではないかと、徐々に継承語学習に義務感を抱き始める様子が見られた。ここからは、移民の親や親戚などが、移民の子に向ける、継承語習得への強い願望や期待によって生じる継承語イデオロギー（中家 2024）がうかがえた。

4.2.3. テーマ③意識的言語学習への苦手意識

テーマ③については、弓佳さんは上述のように、継承語学習へ義務感を抱くようになってきたこともあり、母親の勧めから小学校5年生のときに、母方の親戚からCDラジカセを借りて中国の歌を歌って覚える、という継承語学習を始めることになった。しかし弓佳さんは、母親にひきとめられながらも、1か月程でやめてしまった。その理由としては、中国の歌を歌って覚えることに興味が続かないこと、さらに勉強への苦手意識があった。弓佳さんは「全部を一生懸命勉強するっていうのがあんま好きじゃなかったタイプ」であったという。親の母国での一定期間の生活を経て、継承語を身につけた友人の話聞き、苦勞して継承語を身につけずに、生活から自然に身につけることができることが、かっこよく、羨ましかったという。さらに、弓佳さんは、勉強への苦手意識から、継承語学習に対しプレッシャーを感じ、そのために継承語学習を避けたいという意識もあった。(3)の発話データはその語りである。

(3) 発話データ：サブカテゴリー 成果を出すことの負担と回避

「こう、勉強が苦手な、その、結果出さなきゃいけないから。（中国語を）喋れるようにならなきゃいけないみたいな。義務とかだどちょっとすごくプレッシャーになっちゃう部分が大きくて、自分が。それが多分、うん、嫌に思ってたんですけど。」（2022年3月）

弓佳さんは、勉強が苦手なため、もし自分が継承語学習を続けたら、成果を出すこと、いわば「中国語を話せるようになること」が当然視され、「中国語を話せ

るようになれなかった」という結果は認められないという厳しい要求を懸念し、周囲の大きな願望から生じる重圧を感じていた。この重圧は、ニューカマー2世に向けられる「言語・民族・国家の結合意識に基づいた継承語能力への過度な期待・プレッシャー」であり、ここにおいても、移民の親や親戚などが、移民の子に向ける、継承語習得への強い願望によって生じる継承語イデオロギー（中家 2024）がうかがえた。以上のように、弓佳さんは、継承語学習に意欲があったものの、勉強への苦手意識とそこに含まれた継承語イデオロギーによって、最終的に継承語学習を断念したことがわかった。

4.2.4. テーマ④継承語学習の断念と自己納得

上述のプレッシャーから、家での継承語学習をやめてしまった弓佳さんは、当時以下のような考えを抱いていたという。(4)の発話データはその語りである。

(4) 発話データ：サブカテゴリー 私は日本人だし

「なんかそんなに、別に、私は日本人だしって感じで（笑い）、生まれもこっちだったんで。別に、そんなに、（中国語が話せなくても）いいじゃんって思ってたって感じですね。」（2022年2月）

上述のように弓佳さんは、継承語学習に意欲を持ち、継承語話者になりたいと思いがあ一方で、勉強に苦手意識があり、周囲から期待があることで継承語学習に取り組みたくないという気持ちもあった。そこで弓佳さんは、自分は継承語学習に取り組みませんが、日本で生まれた「日本人」であり、日本人だから中国語が話せなくてもいいと考えた。このように弓佳さんは、継承語学習に取り組みない自分自身を肯定し、継承語学習をしないことを自分自身に納得させるために、Canagarajah (2019) の原始的イデオロギーを用い、「日本に生まれ育ったから日本人であり、日本語話者である」と自分のために、敢えてコミュニティ、民族性、アイデンティティと継承語を固定的に結びつけていた様子が見えてくる。

4.3. 高校・大学における言語イデオロギーと継承語学習

次に、本節では、高校・大学における言語イデオロギーに関連するテーマ⑤～⑧を弓佳さんの語りを示しながら考察していく。

4.3.1. テーマ⑤継承語学習の義務感への薄れ

その後弓佳さんは、モノリンガル・モノカルチュラルな言語文化環境である市外の高校に進学した。奇しくも、その環境が、弓佳さんを小中学校の環境で感じ続けていた継承語学習への重圧から解放したのである。そこには日本人の同級生しかおらず、弓佳さんが「中国語を話せるようにならないといけない」と思うことはなかった。それに加え、弓佳さんは、小・中学校時代のバイリンガルである

1.5世の友人の話から、継承語への意識が変化した。(5)の発話データはその語りである。

(5) 発話データ：サブカテゴリー 言語能力の非永続性

「逆に高校生まで行くと、逆にその小学校の中で話せた子も、もうなんか『最近あんま喋ってなくてわかんないときはある』とかって話を地元帰ったときに聞いてて。＜中略＞なんか自分以外（＝友達）もそんなになんか、喋れなくなってきてっていうか、そういうのも聞いてたからこそ、『あ、じゃあそんなに勉強しても…』みたいな（笑い）感じに思っていたりとか、帰る（中国に帰省する）タイミングとかもそれこそ高校生だとないんで、別にいいやみたいな感じでしたね。」

（2022年3月）

弓佳さんのニューカマー1.5世の友人は、日本での生活が長くなり、自分と親の日本語能力が高くなり日常会話で日本語使用が多くなったことから、親の母語を使うことが減ったという。この友人の経験から、勉強に苦手意識のある弓佳さんは、継承語学習を通して身につけたとしても将来継承語能力を失う可能性があるならば、苦勞する必要はないのではないかと思いついたようになった。

4.3.2. テーマ⑥追求しない継承語能力観

やがて弓佳さんは、大学進学を控え、移民の子どもを支援する保育士になりたい、という夢を抱くようになった。そしてその延長線で、弓佳さんの継承語能力観が明確になってきた。弓佳さんは、日常生活で母親が話す日本語は一般的な日本語における意味規範から逸脱しているが、なんとなく理解することができるという。その語りが(6)の発話データである。

(6) 発話データ：サブカテゴリー 親の意図をくむ力

「なんか日本語で、まあなんか正確な日本語ではないんですけど、ちょっとニュアンスで伝わるような『ああそういうことか』みたいな感じになるので。普段もなんか、多分こう言いたいんだろうなみたいな、日本語で言うところのことなんだろうなっていうのを（母が）頑張って日本語で話してくれるから。それを読む、読み取る力、結構多分培われてる」（2022年3月）

また弓佳さんは、移民の子どもを支援する保育園に従事するにあたり、「外国の困ってる親たちに歩み寄りたいから、それを一つの手段として言語があればいい」と言語は手段にすぎないと考えている。そのため、自分は必ずしも規範的な中国語を身につける必要があると思いついたわけではないとした。その理由は、

弓佳さんが通った小学校の日本語教室教員がそうだったことにある。先生が子どもの母語を学び、使いながら日本語を教える様子に、弓佳さんは衝撃を受けた。その語りが(7)の発話データである。

(7) 発話データ：手段にすぎない言語

「外国の子どもたちを支援したいなとか思ってたんですけど。なんか別に、中国語を学ばなくても、そういうふうに、自分が尊敬してた先生方みたいな日本人の先生方みたいな感じでいければいいやって思ってたんですよ。」(2022年3月)

弓佳さんは、教員の姿から弓佳さんは、言語能力は手段にすぎず、たとえその手段が限定されていても子どもの支援に従事できると考えていた。ここからは、継承語能力を重視せず、部分的な継承語資源によってアイデンティティが表出されるとした Canagarajah (2019) の継承語の実践に基づくイデオロギーがうかがえた。

4.3.3. テーマ⑦安心できる継承語学習環境

こうして弓佳さんは、移民の子どもが通う保育園の保育士になるという夢を抱き、大学に進学した。大学も前述のように言語文化的に均質的なモノリンガル・モノカルチュラル環境であり、ルーツを開示せず日本人のように振る舞っていた弓佳さんは、自らの継承語能力への不安を認識させられることもなかった。むしろ学校生活の中で、弓佳さんは中国語のクラスで、一緒に中国語を勉強する仲間を得て、継承語学習へ追い風が吹いていた。その語りが(8)の発話データである。

(8) 発話データ：サブカテゴリー 学習仲間の存在

「(中国語を)やっぱり聞き取れるから…それでなんか、周りがそんな(継承語能力を)比べる人も、一緒に勉強する人もいなかったのだから<中略>結構(中国語を)聞き取れることはできてたけど書くこととかだったり喋ること、発音とか、すごい綺麗に発音もできてなかったから。だからそれがちょっとずつできるようになって、それは日本人の人が勉強してるのと一緒で、そのできるようになっていくというのがちょっと楽しくて、そしたらもう、喋れるようになりたいなって、ちょっとずつ思ってきて。」(2022年3月)

小・中学校時代は、周囲の中国に背景を持つ友人は、みな中国語を話せたため弓佳さんには、中国語を話す練習をしたり一緒に中国語学習をしたりする友人は今までいなかった。しかし弓佳さんは大学で中国語科目を履修したことによって、初めて共に中国語学習をする学習仲間を得た。そうして弓佳さんは、周囲の学生と歩幅を揃えながら、少しずつ中国語が身につけていく過程に達成感と楽しさを

見出し、「喋れるようになりたいな」とさらに前向きに継承語学習に取り組んでいく。

また、教員との出会いも、弓佳さんの継承語学習を加速させることになった。弓佳さんは、家庭内で両親の話す中国語を日常的に耳にすることから、中国語のリスニング能力の高さは、クラス内でもひと際目立っていた。それにより担当教員は、他の学生がわからない問題を最終的に弓佳さんが回答するよう指名することもしばしばあり、弓佳さんは担当教員へ不信感があった。だが、翌年度の担当教員は弓佳さんのリスニング能力を知ってもなお、特別扱いをせずほかの学生と同様に接したのである。その教員の態度に弓佳さんは信頼を寄せ、家庭言語環境を打ち明けた。それをきっかけに、教員は語学留学に勧めるなど弓佳さんの継承語学習を後押しし、弓佳さんはさらに熱心に継承語学習に取り組むようになったのである。このように、弓佳さんは大学入学後の継承語学習環境は、比較対象となる継承語話者の不在やサポータティブな先生の存在があったことから、精神的な安全性を感じ、主体的に継承語学習に取り組んだことがわかった。

4.3.4. テーマ⑧継承語学習の先に見据えるもの

そして弓佳さんは、継承語学習を通して、「中国語を喋れるようになりたい」とより明確な目的や、大学卒業後の将来の理想像を描き始めた。大学入学前、継承語の実践に基づくイデオロギーから、弓佳さんは、高度な継承語能力を身につける必要はないという言語観を有していた(テーマ⑥)。しかし、大学の授業での継承語学習の経験から、弓佳さんのイデオロギーは将来の夢に即した具体性を増したものとなり、継承語の実践に基づくイデオロギーの変容がうかがえた。就職予定の保育園でアルバイトをしている弓佳さんは、乳幼児とのやりとりから「実感に支えられた継承語使用の経験」(尾関他 2011)を実感する。

(9)発話データ：サブカテゴリー 継承語と仕事

「簡単な単語とかで本当にちょっとずつ喋ったりして、その子(乳幼児)もう結構(私が)アルバイトで来たときに、すごい、こう心を開いてくれるから。そういうのも影響があって、『あ、結構言葉が通じるだけでこんなに誰かの役に立ってる』っていうか。その子にとっては保育園の中で、(私とだけ)中国語話せるんですよ。中国につながってるのは私だけなんですその保育園で。」(2022年3月)

尾関他(2011)は継承日本語話者が周囲の人々の関係性から継承語使用に肯定的な認識を得る様子を「実感に支えられた日本語使用の経験」と述べた。弓佳さんもこれに関連して、大学で勉強した継承語をアルバイト先で話してみたところ、乳幼児が心を開いてくれ、部分的な継承語資源を用いた意思疎通でも、役に立つことができるという実感と、その乳幼児にとって保育園で唯一の「中国につなが

っている」存在が自分であるという肯定感から、弓佳さんの継承語使用者としてのアイデンティティが形成されていった。ここから、部分的な継承語資源を用いる肯定的な態度は変わらないものの、外国から来た親子により一層役立てるようになりたいと願い、今まで掲げていなかった「中国語を喋れるようになりたい」という目標を掲げるようになった。

さらに弓佳さんは、大学外でも自発的に継承語の学びに取り組むようになっていた。弓佳さんは、母方の叔母が教師として実施する、オンライン中国語勉強会に参加するようになった。そして、その勉強会をきっかけに中国語の検定試験に挑戦し、合格することができた。(10)の発話データは、その経験を弓佳さんの振り返った語りである。

(10) 発話データ：サブカテゴリー 挑戦と成功体験

「なんか自分の苦手な部分？をちょっとやってみるっていうのを、この大学生卒業する手前でやり始めてから、<中略>ま、たまたまそれが中国語だったわけで、今回、うん。(検定試験に)受かったからっていうのもあってちょっと自信がついて、<中略>なんかすぐに諦めちゃうよりも、なんかちょっと苦手な選択肢的にこうやりたくない方を、選ぶっていうのもなんか、自分の経験になるんだなってすごい思っ。」

(2022年3月)

ここからは、勉強が苦手な幼少期からずっと避け続けてきた弓佳さんにとって、検定試験の受験級等といった難易度より、検定試験のための受験勉強を頑張った結果、合格という成果を出せたという合格までの過程が重要であったことがわかる。こうして弓佳さんは継承語学習を通して、勉強という自分の苦手分野に挑戦し、自己成長と努力の結実を実感し、自信を得て、継承語使用者としてアイデンティティを形成していったのである。

このように、弓佳さんの継承語への実践に基づくイデオロギーは、大学での継承語学習を経て次第に様相が変化した。弓佳さんは当初は、継承語能力を追求する必要はなく、中国語を聞き取って理解するなどという部分的な継承語能力を用いて実践的なコミュニケーションを重ねればよいと考えていたものの、次第に「中国語を喋れるようになりたい」という継承語能力を高めていきたいというイデオロギーの様相の変化が見られた。以上から、周囲からの継承語能力の期待に応えるわけではなく、自らの意志で自分なりの歩幅で継承語を学び、継承語資源を他者や自らのために活かしながら人生を歩いていくという継承語使用者としてのアイデンティティが形成される様相がうかがえた。

4.4. 考察のまとめ

以上、弓佳さんの継承語に対する言語への認識と継承語への言語イデオロギーの考察を示した。本節では、研究課題について考察と得られた示唆をまとめる。

弓佳さんの継承語への言語イデオロギーは、テーマ①～④では、継承語イデオロギー（中家 2024）と原始的イデオロギー（Canagarajah 2019），テーマ⑤ではイデオロギーの転換点，テーマ⑥～⑧では継承語への実践に基づくイデオロギー（Canagarajah 2019）がそれぞれうかがえた。以下では、弓佳さんのイデオロギーの変遷を振り返り、考察をまとめる。

弓佳さんは生まれてから一度も親の母国に行ったことがなかったが、バイリンガルへの憧れも相まって、総じて継承語に対しポジティブな意識を抱いていた。だがその意識を抱きながらも、中国につながりを有するから中国語を話せないといけなといった固定的な原始的イデオロギーを抱いていた（テーマ①）。そして弓佳さんは成長するにつれ、徐々に継承語学習への義務感を感じ始めるようになり（テーマ②），周囲による過度な継承語能力への期待である継承語イデオロギーによる大きな懸念と重圧を抱き（テーマ③），継承語学習を断念した（テーマ④）。その後日本人生徒が大半であるモノリンガル・モノカルチュラルな高校に進学する。そこでは自分のような移民の生徒が不在だったことから、弓佳さんの継承語能力に抱く後ろめたい気持ちが次第に薄れていった（テーマ⑤）。加えて、友人の継承語能力の変化から、高度な継承語能力を追求する必要はなく、部分的な継承語能力で良いといった継承語への実践に基づくイデオロギーを明確に抱くようになった（テーマ⑥）。さらに大学へ進学後、学習仲間の存在や自分の継承語能力を特別扱いたくない教員との出会いによって、弓佳さんは継承語学習環境に安心感を抱き、継承語学習により熱心に取り組むようになった（テーマ⑦）。弓佳さんは大学入学当初は、継承語への実践に基づくイデオロギーから、部分的な継承語能力を肯定する継承語能力観を有しており、継承語学習にあまり強い関心がなかった。しかし大学での思いがけず充実した継承語の学びを通して、部分的な継承語能力を活かしながらも、継承語能力に対しより高い目標を掲げるようになった。ここから、弓佳さんの継承語への実践に基づくイデオロギーが変化し、継承語学習への向き合い方が変化したことがわかった（テーマ⑧）。

この継承語の言語イデオロギーの様相の変容からは、弓佳さんが身を置く環境の変化が、弓佳さんの継承語の言語イデオロギーの様相に変容をもたらしたのではないかと推察できる。まず、弓佳さんが生まれ育った外国につながる子どもが多い生活・学校環境は、弓佳さんにとって、「私も喋らなきゃいけないのかなみたいなのが思ってた時期はありました」と自分と他者の言語環境や継承語能力を無意識にも比較し、親からの継承語習得への期待を一身に浴びる環境、つまり継承語イデオロギー（中家 2024）を内面化してしまう環境だったのである。その環境が、弓佳さん自身に原始的イデオロギーを抱かせていたと想像できる。しかし、高校・大学に進学し、周囲に外国につながる子どもが少ない環境下では、弓佳さ

んの周囲にはニューカマー1.5世など比較される対象はなく、また親から期待を向けられることもなかったため、継承語イデオロギーから解放されたと解釈できる。こうして弓佳さんは、継承語は話せないが聞いて理解できる、といった自らの部分的な継承語能力を改めて認識することができたのである。こうして「中国語を学ばなくても、そういうふうに、自分が尊敬してた先生方みたいな日本人の先生方みたいな感じでいれればいいや」と、継承語能力を身につけることを、中国につながる存在だから身につけなくてはならない、と絶対的なことだと見なさず、自分にとって心地よい距離感で継承語と向かい合い、継承語への実践に基づくイデオロギーを抱くようになっていった。そしてその後、弓佳さんは大学での継承語学習に取り組むにつれ、「できるようになっていくっていうのがちょっと楽しくて、そしたらもう、喋れるようになりたいなって、ちょっとずつ思ってきて。」と、大学入学前後の、継承語能力を追求せず、部分的な継承語能力を良しとしていた弓佳さんの継承語の実践に基づくイデオロギーに変容が見られ始めた。弓佳さんは、継承語学習を通して言語学習の充実感を味わい、より高い目標を掲げ、「中国語を喋れるようになりたい」と継承語学習に意欲的となっていた。

このように、幼少期から現在に至るまでの環境の変化と周囲の人々の弓佳さんへの関わり方が弓佳さんの継承語の言語イデオロギーに影響を与え、さらにそれを変容させていたことがわかった。

次に、弓佳さんの語りから導かれた、弓佳さんのアイデンティティは以下の通りである。「中国につながっている」証左として中国語を喋れる、という言語・民族・国家の関わりを固定的に捉える本質主義的なアイデンティティを脱却し、その固定的な関わりを乗り越えた主体的な、継承語使用者としてのアイデンティティへの変遷がうかがえた。まず、小・中学校に通っていた頃の弓佳さんは「自分は中国につながってるけど、喋れないからって思って、ちょっと勉強しようって多分思ったんだろうな」と、継承語能力の有無は「中国につながっている」と認識できる証左であり、自分のアイデンティティであったことがうかがえた。これは、コミュニティ、民族性、アイデンティティと継承語を固定的に結びつける原始的イデオロギーとも関連していることがわかる。しかしその後、CDで歌を歌う継承語学習を断念した際に、弓佳さんは断念した理由に「私は日本人だし」と挙げたことから、「中国につながっているけれど、日本で生まれたから自分は日本人であり、継承語学習は不要である」という、不本意ながら継承語学習を断念した弓佳さんが、自分自身を正当化するための論理がうかがえた。これを機に、弓佳さんは自らのアイデンティティを継承語能力に帰することをやめたのではないかと考察する。

その後高校に進学すると、周囲のニューカマー1.5世の子どもも、継承語能力が弱くなっていることを耳にしたことから、弓佳さんの継承語能力への強い思いが薄れていった。一方で大学に進学し中国語科目を履修し、継承語学習に楽しみを見出し、意欲的に取り組んでいく中で、弓佳さんは、他者の期待からではなく自

らの意志で、自らのペースで熱心に継承語を学んでいくようになった。特に、外国につながる乳幼児の多い保育園でのアルバイトにおいて、弓佳さんは「言葉が通じるだけでこんなに誰かの役に立ってる」と自分の継承語能力が人の役に立てること、自分自身が中国につながりを持つことで、乳幼児にとって保育園の中で唯一中国語を使って接することができる存在になれたことに肯定感を抱いた。この弓佳さんの乳幼児とのやりとりは、「実感に支えられた日本語使用の経験」(尾関他 2011)と解釈できる。ここから弓佳さんは、継承語を話すことに身を以て肯定感を抱き、その肯定感からさらに継承語学習に精を出し、継承語使用者としてのアイデンティティを形成した。弓佳さんは、語学資格試験を受験するという大きな挑戦を自らに課し、その結果見事合格し自信を得た。ここでは継承語の資格試験問題を解くために継承語知識を用いるといった部分的な継承語能力を活かしたことが、弓佳さんの継承語使用者としてのアイデンティティの形成に寄与したと考察できる。

このように、弓佳さんのアイデンティティは、言語・民族・国家の関わりを固定的に捉える本質主義的なアイデンティティから、その固定的な関わりを乗り越えた主体的な、継承語使用者としてのアイデンティティに変遷が明らかになった。

以上を踏まえると、弓佳さんの言語イデオロギーとアイデンティティの深い関わりが明らかになった。弓佳さんは、環境の変化から継承語イデオロギーから脱却し、原始的イデオロギーから継承語の実践に基づくイデオロギーへの変遷が見られた。そのような柔軟な言語イデオロギーを持ち合わせたことから弓佳さんは、継承語学習へ向かいはじめ、そこから、仕事場面や自己成長と努力の結実などから継承語話者としての主体的なアイデンティティを形成できたと考察できる。

5. まとめ

本研究は、ニューカマー2世である弓佳さんの継承語への言語イデオロギーとアイデンティティとその変遷を弓佳さんのライフストーリーから明らかにした。その結果、弓佳さんの継承語への言語イデオロギーは、小中学校時代から高校時代、大学時代といった環境の変化により、小中学校時代に強く見られた原始的イデオロギーは次第に弱まり、それと同時に継承語イデオロギーを脱却したことがわかった。加えて高校・大学進学に伴い、継承語への実践に基づくイデオロギーが色濃くなったと同時に、その内部でも変遷が見られたことがわかった。さらに、弓佳さんは、小中学校時代は言語・民族・国家を直線的に固定的に捉えたものである本質主義的なアイデンティティを有していたが、その後大学進学後に、主体的に、継承語使用者としてのアイデンティティを形成していったことがわかった。これらの結果の背後にある要因として考えられるのは、弓佳さんが、移民の子どもが多いマルチリンガル・マルチカルチュラルな環境の小中学校から、正反対の立場に位置する、日本人生徒・学生が中心のモノリンガル・モノカルチュラルで均質的な言語文化環境であった高校・大学に進学したという環境の変化が考えられよう。弓佳さんは、環境が変化した後は、自分なりの継承語との距離感

を見つけ、自らの継承語への言語イデオロギーを変容させながら、本質主義的でない、継承語使用者としての主体的なアイデンティティを形成していった。そして、本研究の結果からは、個人の言語イデオロギーは濃淡を変化させながら長期的に変容し、アイデンティティと深く関わるといことが示唆された。

最後に、本研究の課題は以下の通りである。調査対象者の弓佳さんは、親戚が中国に居なかったため中国への訪問や生活の経験を有さなかったこと、弓佳さんの居住地や学区、いとこと大きく年が離れていることなどが、弓佳さんの継承語への言語イデオロギーやアイデンティティに影響を与えた可能性がある。また、本研究は中国語を継承語とする弓佳さん 1 名の事例研究であるものの、言語継承を考察するにあたり「中国語」という特定の文脈が前提となっていることは否めない。今後は、ニューカマー2世への言語継承への道を拓くために、さらに多様な言語を継承語とする調査対象者に調査を実施し、生まれ育ちの差異による言語継承の多様な様相を考察することで、日本社会における継承語教育の在り方を考える機会を提供できると考える。

参考文献

- Boyatzis, Richard E. 1998. *Transforming Qualitative Information: Thematic analysis and code development*. Thousand Oaks: Sage.
- Canagarajah, Suresh. 2019. "Changing orientations to heritage language: The practice-based ideology of Sri Lankan Tamil diaspora families". *International Journal of the Sociology of Language* 255. pp.9-44.
- カミンズ, ジム (著). 中島和子 (訳著). 2011. 『言語マイノリティを支える教育』東京: 慶應義塾大学出版会.
- ドーア根理子. 2008. 「「通じること」の必要性について——標準化のイデオロギー再考」佐藤慎司. ドーア根理子 (編著). 2008. 『文化, ことば, 教育—日本語/日本の教育の「標準化」を越えて』. 東京: 明石書店. p.63-82.
- Fillmore, Lily Wong. 2000. "Loss of family languages: Should educators be concerned?". *Theory into Practice* 39(4). pp.203-210.
- Kroskrity, Paul V. 2000. "Language ideologies in the expression and representation of Arizona Tewa identity". In Paul V. Kroskrity (ed.) *Regimes of Language: Ideologies, Politics, and Identities*. Santa Fe: School of American Research Press. pp.329-359.
- 倉田尚美. 2018. 「移動することばの青年とアイデンティティ」川上郁雄, 三宅和子, 岩崎典子 (編著) 『移動とことば』東京: くろしお出版. pp.39-62.
- 真嶋潤子. 2019. 『母語をなくさない日本語教育は可能か—定住二世児の二言語能力』. 大阪: 大阪大学出版会.
- 松本一子. 2005. 「日本国内の母語・継承語教育の現状: マイノリティ自身による実践」. 『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』1. pp.96-106.
- 三浦綾希子. 2015. 『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ: 二世世代のエスニックアイデンティティ』. 東京: 勁草書房.
- 中家晶瑛. 2022a. 「学齢期の継承語教育の有無から見えるニューカマー2世青年の継承語への意識と親子関係」. お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻日本語教育コース修士論文 (未公開).

- . 2022b. 「親子間使用言語を日本語とするニューカマーの親子から見えることばの実践への意味付けと親子関係—ことば観との関わりに着目して」. 『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』13. pp.126-161.
- . 2023. 「ニューカマー親子の継承語教育・学習への認識と親子関係の様相」 『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』14. pp. 3-30.
- . 2024. 「言語継承における継承語不安と継承語イデオロギー—日本社会で継承語を継承しなかったニューカマー2世の語りから—」. 『母語・継承語・バイリンガル (MHB) 研究』20. pp.99-111.
- 中島和子. 2016. 『完全改訂版 バイリンガル教育の方法』. 東京：アルク.
- . 2017. 「継承語ベースのマルチリテラシー教育:米国・カナダ・EUのこれまでの歩みと日本の現状」. 『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』13. pp.1-32.
- Nakamura, Janice. 2016. “Hidden bilingualism: Ideological influences on the language practices of multilingual migrant mothers in Japan”. *International Multilingual Research Journal* 10(4). pp.308-323.
- Norton, Bonny. 2000. *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change*. London: Pearson Education.
- 尾関史, 深澤伸子, 牛窪隆太. 2011. 「日本国外で成長する子どもたちにとっての日本語使用経験の意味」. 『リテラシーズ』9. pp.11-20.
- Pavlenko, Aneta and Adrian Blackledge. 2004. *Negotiation of Identities in Multilingual Contexts*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Rumbaut, Rubén G. 2006. “Severed or sustained attachments?: language, identity, and imagined communities in the post-immigrant generation”. In Levitt, Peggy and Mary C. Waters (eds.) *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*. New York: Russell Sage Foundation. pp.43-95.
- 坂本光代, 宮崎幸江. 2016. 「日本に住む多文化家庭のバイリンガリズム」. 宮崎幸江 (編) 『日本に住む多文化の子どもと教育—ことばと文化のはざまで生きる— (増補版)』東京：上智大学出版. pp.17-46.
- 高橋朋子. 2013. 「中国帰国児童の主体的な関係性の構築を目指して」. 『異文化間教育』37. pp.15-31.
- . 2019. 「中国にルーツを持つ子どもの母語・継承語教育」. 近藤ブラウン妃美, 坂本光代, 西川朋美 (編著) 『親と子をつなぐ継承語教育：日本・外国にルーツを持つ子ども』東京：くろしお出版. pp.253-267.
- 田慧昕, 櫻井千穂. 2017. 「日本の公立学校における継承中国語教育」. 『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』13. pp.132-155.
- 坪田光平. 2018a. 「中国系ニューカマー第2世代女性の学業達成過程：親子関係と文化継承に注目して」. 『日中社会学研究』26. pp.22-35.
- . 2018b. 「中国系ニューカマー第二世代の親子関係とキャリア意識—トランスナショナルな社会空間に注目して」. 『国際教育評論』14. pp.1-18.
- 土屋雅子. 2016. 『テーマティック・アナリシス法—インタビューデータ分析のためのコーディングの基礎—』. 京都：ナカニシヤ出版.
- 田慧昕, 櫻井千穂. 2017. 「日本の公立学校における継承中国語教育」. 『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』13. pp.132-155.
- Skutnabb-Kangas, Tove. 1981. *Bilingualism or Not: The Education of Minorities*. Lars Malmberg and David Crane (trans.), Clevedon: Multilingual Matters.
- 山本晃輔, 榎井縁. 2023. 『外国人生徒と共に歩む大阪の高校：学校文化の変容と卒業生のライフコース』. 東京：明石書店.

